

## 第三セクターとして港機能を担い、地域の発展に貢献

清水埠頭(株) 常務取締役  
向島克彦 さん

### 石炭専用埠頭の運営管理を目的に設立

当社は1957年、当時の主流エネルギー源であった石炭の海陸一貫の流通・作業拠点として国が建設した石炭専用埠頭（現在の富士見埠頭）の運営管理を目的に、静岡県、清水市、民間の共同出資による第三セクター方式で清水石炭埠頭(株)として設立されました。

1958年、県所有のアンローダーと横送りコンベヤーが完成し、石炭1030トンの陸揚げを機に「県有設備の有効利用に努め、利用者の利便を図り、公共的に運営すること」を基本方針として事業を開始し、1961年の石炭陸揚げ高は27万7千トンに達しました。

1960年からは、わが国の高度経済成長を背景に、建設資材としての砂利の取扱が始まり、安倍川から採取された砂利を清水港から首都圏へ積出し、東京五輪が開催された1964年の取扱量は280万トンに達しました。

1962年から取扱を始めた輸入ウッドチップは、県所有の大型機械を活

用して荷役作業を行うとともに、岸壁の後背地を専用ヤードとして整備し、保管・搬出を行っています。

1970年には製紙業界の好景気に支えられて取扱量が急増し、100万トンを超えました。現在は北米とインドネシアから製紙と繊維板の原料用として年間約30万トンの取扱量があります。

### 駿河湾で曳船（タグボート）事業を展開

一方、1962年には、静岡県の要請により曳船事業を開始しました。当初は事業の採算性が危惧されましたが、寄港船舶の増加や大型化に伴って業績は向上しました。

1970年から興津埠頭で本格的なコンテナ荷役が開始されると、大型船の安全・正確な離着岸作業に欠かせない高馬力の大型曳船を建造し、稼働回数は1982年に5735回のピークを迎えました。

現在、共有船を含めて清水港に6隻、田子の浦港、御前崎港に各1隻を配備し、船舶代理店の要請に応じ、駿河湾一円で大型船の入出港に24時間

対応しています。

### 倉庫サイロ、セメントSS、リサイクルに参入

1960年代、輸入穀物の需要が高まり、穀物をバルク（ばら積み）で捌く施設が求められていました。そこで当社は1970年から8期にわたって穀物サイロを建設し、倉庫サイロ事業を展開しています。

海外から輸入した穀物をバルクで効率的に捌く物流基地として、静岡県、山梨県などの製粉・精麦・食品・飼料工場に安全で安定した原料供給を行っており、年間約40万トンの取扱量があります。

1970年と1984年にはセメントメーカーの要請でサービスステーションを建設。九州から海上輸送したセメントを、24時間自動出荷体制で静岡県・山梨県に供給していますが、年間取扱量は約42万トンで、今後リニアの建設による需要拡大が期待されます。

2004年、リサイクル事業を発足させ、港湾地域で発生する産廃木材や家屋の解体材を粉砕して、製紙原

料やボイラー用燃料として再利用する工場を運営するほか、2015年からはお茶コーヒー等のしぼりかすを乾燥し再利用する事業を開始しました。

このように当社は「時代の流れを的確につかみ、お客様のニーズに応える」「安心・安全を基本理念に、前に進む」姿勢で経営を進めています。



LNG船の曳航作業



ショベルローダーとコンベヤーでウッドチップを搬出



多品種のバラ穀物を分別管理するサイロ施設



セメント船の搬入作業